



祝祭日には国旗を掲げましょう。

大阪天満宮社報 第61号

てんまてんじん



遷宮で結ぶ人の輪
心の輪
第六十二回神宮式年遷宮



年首御慶

壬辰 元旦

表紙解説 束帶天神像 2 頁
平井直水「流鏞馬図屏風」修復成る 5 頁

天満の名水を再び 6 頁
所蔵古文書から② 8 頁
安政元年の大地震と天神祭 12 頁

えびす祭初天神・梅まつり 14 頁
千宗貞宗匠「献茶式」 14 頁

束帶天神像

松浦

清（大阪工業大学准教授）

大阪天満宮所蔵 紹本著色
縦一〇〇・四cm 横三九・六cm
桃山時代

「懸蓬菜（かけほうらい）」

京都・大阪などには、新年の祝儀の飾り物の一つとして蓬莱飾りがあり、「台蓬莱」と「懸蓬菜」の二形式があります。

「台蓬莱」は、三方（さんばう）の盤の上に白米を盛り、熨斗鮑（のしわいび）・搗栗（かちぐり）・昆布・野老（ところ）つる草の一種）・馬尾藻（ほんだわら）・海草（えい）などを飾つたものです。

もう一つの「懸け蓬莱」は、稻の束に松竹梅・日陰蔓（ひかげのかずら）・シダ植物の一種）・裏白・御幣などをつけて、床の間の飾りとします。

当宮では、関係者への歳末挨拶に持参していますが、この数が千三百余にもなります。多くの授与品や縁起ものは業者が製作していますが、

公家の正装である束帶姿で描かれた天神像です。冠を被り、黒の袍を着用し、白い表袴を穿いています。下襲の裾を背後に長く引き、笏を手にして、儀仗用の飾太刀を佩用するのも、しばしば目にする表現です。尊容はどうでしょうか。大きく見開られた目は吊り上がり、目頭と目尻に薄く朱が差されているのは血走った眼球の描写と判断されます。上歯で下唇を噛む表現も、右手で笏の上部を押さえ込むような仕草も、激情の表現と見受けられます。

「怒り天神」といわれ、怨霊神として畏怖された信仰を示しています。しかし、表情をよく見ると、端正で穏やかであり、華やいだ雰囲気さえ感じられます。火雷天神としての激しさは、大分抑えられているといえます。飛梅は、梅花を愛した菅公が大宰府配流の際に、紅梅殿の梅を詠まれたという「東風吹けばほひおこせよ梅の花」主なしとて春を忘るな」の歌にまつわる伝説で、梅花が菅公を慕つて配流先まで飛んで行つたといふのです。

一夜松には、いくつか異なる伝承がありますが、北野天満宮の創建本図の天神は上げ畳に坐す姿で表されています。

現されています。上げ畳は貴人の座所としての表現で、畳の縁の色や文様によって、着座人物の身分が描き分けられることになります。天皇・三后・上皇は縫綱縁とされ、親王・攝関・大臣は大紋高麗縁、公卿は小紋高麗縁とするのが普通です。本図では、やや複雑な文様の小紋高麗縁として描かれているようですが、天神画像では大紋の例もあり、また、神としての意味合いを強調する場合は、他の神仏の表現と同様、縫綱縁として描かれることもあります。

本図の背後には、飛梅や一夜松を連想させる梅と松も見えます。飛梅は、梅花を愛した菅公が大宰府配流の際に、紅梅殿の梅を詠まれたという「東風吹けばほひおこせよ梅の花」主なしとて春を忘るな」の歌にまつわる伝説で、梅花が菅公を慕つて配流先まで飛んで行つたといふのです。

一夜松には、いくつか異なる伝承がありますが、北野天満宮の創建本図の天神は上げ畳に坐す姿で表されています。



壬辰（みづのえ・たつ）

懸蓬菜は全て神職・巫女の手作りです。

蓬菜とは

蓬菜とは、蓬萊山ともいい、古代中国で東の海上（海中）にある仙人が住むといわれた仙境でした。神仙思想のなかで説かれ、中国最古の地理書『山海經』の「海外北經」に「蓬萊山は海中にあり、大人の市は海中あり」と記されています。

我が国でも、『丹後國風土記』逸文などに記され、神仙思想による常世国伝承の不老不死などの影響を受け、浦島伝説の理想郷のイメージなどに習合していました。

『竹取物語』にも「東の海に蓬萊という山あるなり」と記され、また「蓬萊の玉の枝」が登場する富士山の縁起を語る箇所では、「不老不死」

であります。

去年の干支は、「辛卯（かのとう）」でした。

今年の干支は、「壬辰（みづのえ）」です。

さて、今年は「壬辰」です。

「壬」は「孕（はらむ）」、すなわち「妊」の姿を表しています。また「任」にも通じ、「責任を担う」「任務を受ける」という字義もあります。一方の「辰」は、理想に向かつて辛抱強く、かつ慎重に、いろいろの抵抗や妨害と闘いながら歩みを進めていくことを意味します。

ですから今年は、各人が強い責任感を持ってその任にあたり、様々な障害を乗り越えて、前進しなければならない年なのです。ちなみに、一回り前の昭和二七年には、サンフランシスコ条約の締結によって、戦後の日本の方針性が示されました。

言い換えると、「壬辰」の今年は、新たな指針を明確に示すべき年といふことです。（安岡正篤大人の著書より）

平成二十四年元旦 大阪天満宮

（辛）は、これまで地下深く潜在していました。

（壬）は、これまで地下深く潜在していました。

（辰）は、これまで地下深く潜在していました。

（辛）は、これまで地下深く潜在していました。



奉納から百十七年の歳月が流れて、屏風は痛みがひどくなつておきましたので、昨年(平成二十三年)六月、(株)工房レスターに修復を依りました。き間違ないと考えてよいと思われます。

平井直水 「流鏑馬図屏風」修復成る

当宮に伝わる六曲一双「流鏑馬図屏風」は、平井直水によつて明治甲午（一九〇七年）仲春に描かれ、明治二十九年十一月八日に奉納されました。

頼し、九月末見事によみがえりました。レストアでは、屏風の枠を新しく作り直し元通りの朱漆で仕上げ、梅鉢の金具はもとのを使用したそうです。大縁（おおべり）には、梅鉢紋を織り出した西陣織の本金襷がつか

的を矢で射るのでなく、半弓で打ち破るという当宮独特の流鏑馬の様式を表現しています。

われていましたので、この度も本金

を使い西陣で織らせて、明治の姿そのままに修復しましたとのことです。流鏑馬図屏風右隻には、本駆射手の雄々しい狩装束姿が描かれ、馬の脚元には的の破片が散らばっています。左隻には、的が描かれており、

的を矢で射るのではなく、半弓で打ち破るという当宮独特的流鏑馬の様式を表現しています。

流鏑馬図屏風を描いた平井直水は万延元年（一八六〇）十一月八日大阪雜喉場に生まれました。三三歳で深田直城に師事し、努力をかさねて一家を成し、山水花鳥に長じ、とくに孔雀を描くのを得意としました。明治三十三年パリ万博、明治三十七年セントルイス万博、及び国内諸種の会に出品して金銀銅牌を数多く受けています（『浪華摘要』）。師の深田直城ともども森琴石と親交がありました。門下生に高畠華宵、金島桂華がいます。没年は不明ですが、大正年間に亡くなつたとされています。

当宮所蔵の平井直水の作品は、「流鏑馬図屏風」の他に、扇面の「流鏑馬図」と、「孔雀図」など三幅の掛軸があります。

幅の掛軸があります。

宵えびす 一月九日（月）
遷幸之儀・宵宮祭

本えびす 一月十日（火）
えびす大祭

境内行列

午後二時～
福餅振る舞い（境内）

午後四時～
福餅振る舞い（北新地）

午後八時半～
一月十一日（水）

残り福
還幸之儀・報賽祭



諸行事の御案内



本年で復興六年目を迎える天満天神えびす祭。

◆初天神梅花祭

府へ飛んだという「飛梅伝説」など
天神様と梅との関わりを物語る伝承

昨年より、招福娘の選考会を開催するなど、年々充実度を増しています。本年は応募総数八〇〇名を越える中から、二十五名の招福娘が選ばれました。

本宮	一月十五日(水)	午後一時(火)
福玉まき	午後四時(火)	午後一時(火)
福玉まき	午後四時(火)	午後一時(火)

は数えきれません。
そこで当宮では平成十六年より、
天神様の愛梅の心を偲んでいただこ
うと、「てんま天神梅まつり」を開
催しております。

十日の午後三時からは、北新地クイーン・準クイーンなどが行列を組み境内を歩き、続いて四時より北新地クイーン・招福娘らによる福餅の振る舞いを行います。御参詣の皆様に少しでも多くの福をお持ち帰りいただければと思ひます。

毎月の二十五日は天神様（菅原道真公）の御縁日ですが、年の初めの御縁日は、特に「初天神」と申します二十四・二十五日の境内は、鷦鷯神事・阪神・オリックスの野球選手による福玉まきなどの行事で大変賑わいます。福玉と交換していただいだお餅によって、豪華な景品が当た

境内では、地域観光物産展・梅酒市、骨董市、陶器市など週替わりで様々な催し物がございます。

るかも。参加無料ですので、お気軽にお申込み下さい。

◆てんま天神梅まつり

二月八日（水）～二月四日（日）

東日本大震災復興祈願といたしまして、御本殿にて「鵜島神樂奉納」を斎行いたします。他にも夜間の催しとして、「講談・神楽・御能」など天神様が梅花を愛でられたことは、がござります。

「東風吹かば…」の御歌によつて広く知られています。またこの歌に感じた「御前の梅」が一夜にして太宰

特に二十五日の午後六時からは、昼夜間とはまた違つた境内の雰囲気を存分に楽しんでいただければと考えております。

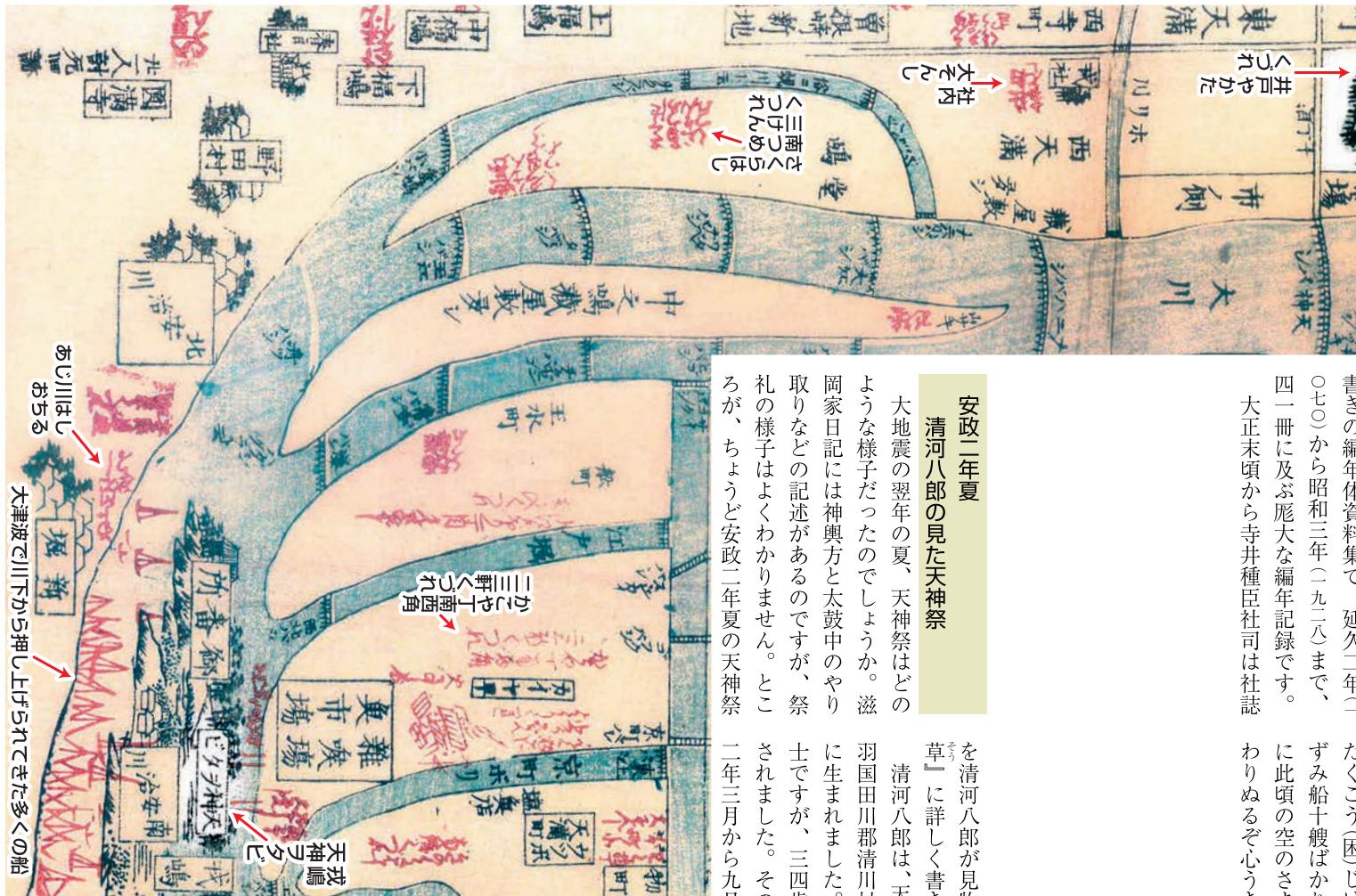
特に二十五日の午後六時からは、東日本大震災復興祈願といたしまして、御本殿にて「鶴鳥神樂奉納」をして、「講談・神楽・御能」などを斎行いたします。他にも夜間の催しとして、がござります。

昼間とはまた違った境内の雰囲気を存分に楽しんでいただければと考えております。

えびす大祭
境内行列
午後三時～
福餅振る舞い（境
午後四時～
福餅振る舞い（北
午後六時半～
一月十一日（水）
残り福
還幸之儀・報賽祭

大阪天満宮所蔵古文書から ②
嘉永七年(安政元年・一八五四)

六月・十一月、三度の大地震と天神祭



**安政二年夏
清河八郎の見た天神祭**

大地震の翌年の夏、天神祭はどのような様子だったのでしょうか。滋岡家日記には神輿方と太鼓中のやり取りなどの記述があるのですが、祭礼の様子はよくわかりません。ところが、ちょうど安政二年夏の天神祭

「大坂地震記」は宮内庁書陵部収蔵の『南陽叢書』の巻四に收められています。「天満宮社誌資料」は、手書きの編年体資料集で、延久二年(一〇七〇)から昭和三年(一九二八)まで、四冊に及ぶ膨大な編年記録です。大正末頃から寺井種臣社司は社誌の記事が採録されていたのです。

前述のように嘉永七年の日記が現存せず、地震の一〇日後に斎行された天神祭の様子など調べようがないと思われましたが、当宮所蔵「天満宮社誌資料(L2)」に「大坂地震記」の記事が採録されていたのです。

嘉永七年六月十四日の深夜に大坂の町は強震に見舞われました。伊賀上野を震源とする直下型地震です。嘉永七年六月十四日の深夜に大坂の堀川に存せず、地震の一〇日後に斎行された天神祭の様子など調べようがないと思われましたが、当宮所蔵「天満宮社誌資料(L2)」に「大坂地震記」の記事が採録されていたのです。

〔先々代宮司〕と考えられます。

「大坂地震記」には、六月十三日の晩ごろ、一度強い揺れがあつたけれどもそれで治まり、翌十四日の深夜に強震、十五日の明け方までに三五、六回余震があり、十五日中にも一五、六回の余震があつたと記しています。そして、十五日の夜には、地震を恐れて「船にて大川にうかびぬる人多し」とあり、大坂の堀川に逃れて夜を過ごした人が多かつたようです。皮肉なことにこのときの体验によって、十一月に起こった海溝型大地震の際も、大勢の人々が船に乗って堀川に避難し、地震の後に襲ってきた大津浪に呑まれて多くの犠牲者を出することになりました。

天神祭について「大坂地震記」は、次のように記しています。
「六月廿四日 けふは天神社の地車六番、宮入の折から、雨となりしき故、物商ふ人、茶店出せる男杯、い士ですが、三四歳のとき江戸で暗殺されました。その清河八郎が、安政二年三月から九月まで母龜代と下男をつれて西国周遊の奉母大旅行をします。八郎二十六歳、母四〇歳でした。

その大旅行中、六月二十四日午前に大坂に入り、七月五日に大坂を出立するまで一〇日余り、今橋築地(現中央区北浜二丁目)の高級料理旅館「瓢箪屋」に宿泊しました。瓢箪屋の主人は、茶帶屋源兵衛は、茶人であり、瓢箪コレクターとして有名な人物で、当宮を信仰し瓢箪石その他を奉納しています。

を清河八郎が見物し、旅日記『西遊草』に詳しく書き留めているのです。清河八郎は、天保元年(一八三〇)出生羽国田川郡清川村の素封家、斎藤家に生まれました。いわゆる幕末の志士ですが、三四歳のとき江戸で暗殺されました。その清河八郎が、安政二年三月から九月まで母龜代と下男をつれて西国周遊の奉母大旅行をします。八郎二十六歳、母四〇歳でした。

「六月二十五日 浪華橋の辺は人声憧々として、一面の船燈籠真に都会の一大奇観なり(中略)。暮かたより浪華橋篝火処々にてらし、白昼の如くかがりは、尤も高大にして、焰々天をこがすばかりなり。松火また燈籠、かがりのひかりにて、一面火をもやすに類し、中々神輿の舟を見とめがたし」とあり、震災から半年後の天神祭は、自肅などはせず、少しでも大坂の町に活力を与えるよう盛大に斎行されたようです。

なお、清河八郎一行は、安政二年九月十日、無事庄内に帰着しました。その後の十月一日、江戸を直下型大地震が襲いました。いわゆる「安政の大

廿五日 天神御祭禮、例年より早く纂課実録係を拝命した嗣子種長に社誌資料収集を命じました。「大坂地震記」の記事を採録したのは種長(先々代宮司)と考えられます。

地震と天候不順のせいで例年に比べ寂しいお祭りとなつたようです。本より、川すじの篝などは減ぜねど、大川のすずみ船は、例の年の半にもたらず、遠方の見物人も是に同じ

東海地震・南海地震

嘉永七年の大坂は、六月の大地震の記憶が消えないうちに、十一月四日には東海地震に、翌五日に南海地震に襲われました。

嘉永七年十一月四日・五日

十一月四日朝八時過ぎ、東海地震が起り、「明地に小屋懸、老少多く小船二乘」と「大地震両川口津浪記」(天正橋東詰の石碑)は記録しています。この四日の地震で天満天神境内の井戸屋形がくずれ、坐摩宮表門石鳥居が崩れました。

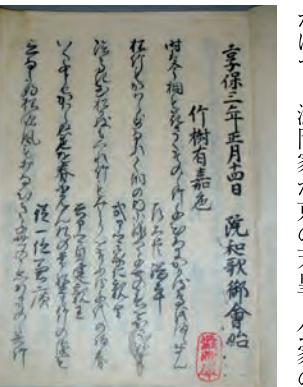
そして「翌五日申刻(午後四時頃)大震。家くつれ、出火も有。恐敷有様漸治る頃、雷の如くひ、き、日暮頃海辺一同津浪。安治川ハ勿論、木津川別而はげ敷、山の如き大浪立、東堀迄泥水四尺計込入、両川筋ニ居合す数多の大小船、碇綱打きれ、一時川上へ逆登」、安治川橋はじめ多くの橋がくずれ落ちたと「大地震両川口津浪記」は書いています。

清河八郎(岩波文庫表紙カバー)

【諸国大阪 大地震大津波細見一覽】(御文庫八五二八) 沖國藏

御文庫所蔵の歌書群 — 滋岡家旧蔵書

相愛大学・近畿大学 非常勤講師 盛田帝子



〔中興〕



皇室·公家章

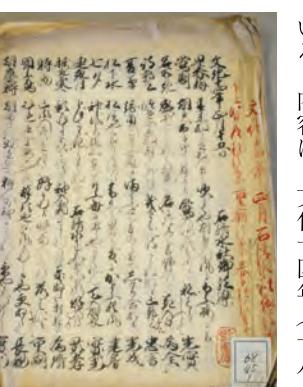
力阪天満宮の御文庫の中に所蔵されている歌書は全部で二百六十一点におよぶ（『大阪天満宮御文庫国書分類目録』昭和五十二年）が、中に【滋岡庫】（縦二・八糸×横一・四糸、朱陽丸印）という藏書印の押された歌書群がある。【写真1】『享保三年於禁中御会始』（目録番号六八一「二六」より）歌書の内容を見ると、ひとつ特徴として宫廷歌会資料（主に正月の御会始の歌会資料）が二十五点含まれている。御会始の記録は、享保三年（一七一八）の禁中の歌会記録から始まつて文政四年（一八二二）まで見られ、江戸時代の中期から後期にかけて、滋岡家が京の天皇・公家の

和歌に興味を持ち、年少の歌を詠じたことを記す。年少の歌を詠じたことを記す。

宮中の天皇や仙洞（院）が主催して行う宫廷歌会は、毎月定期的に開かれていた歌会と、不定期な歌会があつた。例えば、京都御所の中にあつた東山御文庫に所蔵されている「光格天皇御日記案 寛政十年」から、光格天皇が主催した寛政十年（一七九八）の宫廷歌会をみてみると、年例が、和歌会始（1月24日）・柿本神影供（3月18日）・星夕（7月7日）、月例が、月次（24日）・三社法楽（15日）・水無瀬法楽（22日）・聖廟法楽（25日）、隨時開催が、小御所（8回）・学問所（4回）・小座敷（37回）と、年間百回以上の歌会が、内裏で行われていたことになる。これに加えて後

桜町院主催の仙洞での歌会も行われていたのだから、

皇室・公家華



〔四〕

の歌いかいるエホルヨーがなんぢな
ならないものであつたことが知ら
よう。滋岡家では、京の御会和歌姿
料を少しずつ収集し、滋岡長昌のと
うに、公卿歌人に入門して堂上歌学
を学んでいる人もいる。大坂の地に
あって、伝統的な堂上歌学を学ぶの
は、珍しいことではない。しかし、
滋岡家の歌書群から知られるのは、
それが一代限りではなく、代々続い
ていることであり、宮廷文化と滋岡
家との深いつながりを思わせる。

写本の奥書には「右 飛鳥井左兵衛督雅久卿御筆。功長（朱筆）と記され、滋岡家十代目の功長が、京の堂上歌人飛鳥井雅久の自筆本を手にいれていたということになる。【写真3】。ところが、雅久はこの時十八歳。『公卿補任』によると、文化十四年に「左兵衛督」だったのは、父の雅光（三十六歳）である。あるいは左兵衛督雅光の「光」を「久」と功長が誤って記してしまったのだろうか。「雅久」を信ずれば十八歳「雅久」の自筆本ということになり、「左兵衛督」を信すれば、父「雅光」の自筆本ということになる。

飛鳥井家は代々、歌道・蹴鞠を家職とし、宮中に仕えた家である。飛鳥井家・冷泉家の歴代の当主は、歌道家としての長い伝統を誇り、十分な教養、実力もあつたことから、戸戸時代を通じて「歌道宗匠」として常に天皇の補左役を務めていた。

てんまでんじん 第61号



二代滋岡長祇画像

鳥井家当主雅光、もしくはその息男雅久の自筆本を手に入れ、写本すべてに目を通し、朱筆で校合を行い、奥書を記した。では、家格の違う京の歌道宗匠家、飛鳥井家から、そのまま筆本を功長はどうやって手に入れたのだろうか。

功長は滋岡家の十代だが、実は、七代長昌の養子で、飛鳥井雅光の実子であった（田中方男「大阪天満宮史 神主・社家の系図」『大阪天満宮史

の研究（一九九二）所収）。本書の書写者である可能性が高い飛鳥井雅光の実子である。書写者が雅久で、あつても実の兄弟ということになる。功長は、飛鳥井家から滋岡家に養子入りする以前に父雅光（もしくは雅久）が筆写したこの宫廷歌会資料を手にいれており、滋岡家に養子入りする際に持参した可能性が高い。

京の公家文化、特に宫廷歌会の中 心にあつて歌会の運営に深く関わつて いた飛鳥井家に伝わった資料が、



十六 欽因功表象

また、『詠草 第一至第三（天明至文化九年）』（目録番号六八一六五）一冊は、天明六年（一七八六）から文化九年（一八一二）までの滋岡長昌の自筆草稿で、和歌・発句などから成る。長昌は、天明六年に京の公家の西洞院家の歌会に出詠していたり、寛政十二年三月二十四日、公家の歌道定匠・芝山持豊に「寄道祝」歌を提出して入門し、以後、芝山家の歌会に出席していることが知られる。

年』(目録番号六八一七)一冊は、作者が飛鳥井家歌会に和歌を出詠していることから、著者は飛鳥井家門人であることが知られる歌集である。

これらの歌集から、江戸時代、京の正統的な和歌文化が滋岡家を通じてどのように天満宮にもたらされていたかが知られるのである。大阪天満宮所蔵の和歌資料から、京の堂上和歌の影響が窺い知られることは、非常に意義深いことである。

表千家 千宗員宗匠 献茶式

一月一七日の午前十時三十分より、表千家不審菴の猶有齋千宗員宗匠のご奉仕によって献茶式が斎行されました。前年には同じく表千家の三木町宗匠のご奉仕がありましたので、二年にわたって宗匠方にご奉仕いただきましたことになります。

献茶式当日

午前九時にご参着になつた宗匠は、参集殿のお控えにお入りになり、お召し替えの後、寺井宮司の挨拶をお受けになりました。その後、御手水之儀をすまされ、定刻に宮司以下祭員とともに参進し、御本社幣殿に着座なさいました。

修祓、一拝、献饌に次いで、宗匠はお点前座にお進みになり、まず「御炭の点前」を行われました。このお作法は、湯釜を風炉から外して炭を継ぎ足すものです。これに続いて「御香」のお点前があり、大前には名香が献じられました。

続いてお点前は進行し、静かに響く釜音と、茶筅が清められるさわやかさが聞こえます。



12代、13代 宗也父子 平成十四年式年の献茶祭

十三代 久田宗也様が急逝

表千家、裏千家、武者小路千家の縁戚であり、表千家を支える宗匠の格式を有する久田家による当宮へのご奉仕は、大正一五年、当宮に献茶御道具一式を奉納された一代無適齋守一宗也宗匠からで、この方は、昨年一〇月にご逝去された一二代尋牛齋宗也宗匠のお父上にあたります。

一二代宗也宗匠のお父上にあたります。牛齋宗也宗匠の久田和正様が、半床

かで微かな音との調和のなか、祭員によつて大前へ季節の御菓子が進め参らせられます。いよいよ宗匠は覆面をつけて「御濃茶」一服を点じて大前の仮案へお進めになり、改めて「御薄茶」一服を点じられ、無事に大前へ献じられました。

その後、宗匠は、御仕舞の事をお城充興宮司様の拝礼、当日の副席に足して自座に復されました。

宮司の祝詞奏上、宗匠の拝礼と次第は進み、来賓の道明寺天満宮南坊

進めになり、最後に水差しのお水を受けて自座に復されました。

大前の仮案へお進めになり、改めて「御薄茶」一服を点じられ、無事に大前へ献じられました。

その後、宗匠は、御仕舞の事をお城充興宮司様の拝礼、当日の副席に足して自座に復されました。

宮司の祝詞奏上、宗匠の拝礼と次第は進み、来賓の道明寺天満宮南坊

進めになり、最後に水差しのお水を受けて自座に復されました。

予定より長くお過ごしください、柔和な笑顔と優しいお話をぶりが印象的な若宗匠のご奉仕ありました。

現家元である第一四代而妙齋千宗左宗匠のご長男であり、先年ご奉仕された三木町宗匠の兄君にあたら

れました。平成一〇年二月に臨済宗大徳寺派前管長の福富雪底老師から

代々の若宗匠が名乗る「宗員」とい

うお名前も継承されました。

また、同月の八、九日には表千家同門会全国大会が大阪で開催され、茶席として当宮も選ばれたため、全員から多数のお弟子さんが拝服参拝にお越しになりました。

同門会の全国大会が大阪で開催され、茶席として当宮も選ばれたため、全員から多数のお弟子さんが拝服参拝にお越しになりました。

同門会全国大会とは、表千家同門会と、左宗匠の長男であり、先年ご奉仕された三木町宗匠の兄君にあたら

れました。平成一〇年二月に臨済宗大徳寺派前管長の福富雪底老師から

代々の若宗匠が名乗る「宗員」とい

うお名前も継承されました。

現家元である第一四代而妙齋千宗左宗匠のご長男であり、先年ご奉仕された三木町宗匠の兄君にあたら

れました。平成一〇年二月に臨済宗大徳寺派前管長の福富雪底老師から

